

“翻訳とは何か”を明治以降の実例を交えて解説

翻訳とは何か —職業としての翻訳

朝日新聞・書評欄
(2011.9.30)で絶賛!
その他、好評書評多数

山岡 洋一 著

四六判・290頁 定価(本体1,600円+税) ISBN978-4-8169-1683-0 2001年8月刊行

当代一流の翻訳者が論じる本格的翻訳論

翻訳のあり方、歴史上の翻訳者の生涯から、翻訳技術、翻訳市場、現代の翻訳教育産業や翻訳学習者の問題点まで、総合的に「職業としての翻訳」を論じ、翻訳文化論を展開する。真の翻訳者とは何か、翻訳とは何か、を伝える翻訳学習者必読の一冊。

目次

- はじめに 真夜中の電子メールとアマゾンの蝶々
- 第1章 翻訳とは何か
- 第2章 歴史のなかの翻訳家
- 第3章 翻訳の技術
- 第4章 翻訳の市場
- 第5章 翻訳者への道
- 第6章 職業としての翻訳
- 終わりに 文化としての翻訳

山岡 洋一 やまおか・よういち

1949年、神奈川県生まれ。経済・経営・金融分野を中心とする出版翻訳と産業翻訳にたずさわる。編著書に「ビジネスマンのための経済・金融英和実用辞典」(日経BP社1996)、訳書に「ビジョナリー・カンパニー」(日経BP出版センター1995)、「クルーグマンの良い経済学悪い経済学」(日本経済新聞社1997)、「市場対国家」(日本経済新聞社1999)、「バブルの歴史」(日経BP出版センター2000)など多数。

… 翻訳とは本来、新しい情報を取り入れるためのものだ。『蘭学事始』に描かれた『解体新書』の翻訳の過程こそが、この仕事の原点である。それまでに聞いたことがなく、読んだこともない内容を理解し、読者に伝えるのが、翻訳者の本来の役割である。だからこそ、翻訳は魅力のある仕事なのだ。…(第6章より)

2017.9

お問い合わせは… **日外アソシエーツ 営業局**

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	注文書	翻訳とは何か — 職業としての翻訳	冊
		定価(本体1,600円+税) ISBN978-4-8169-1683-0	
		■お名前	

■ 自著を語る—「後書きに代えて」

職業としての翻訳をテーマとする本を書きしてみたいと考えるようになったのは、もう十年以上も前のことだ。そう考えたのは当時、翻訳書は毎日何点も出版されているのに、翻訳をテーマにする本はほとんどなかったからである。

いまでは、大きな書店に行けば翻訳をテーマにする本が何冊も並んでいる。状況は一見、様変わりしているわけだが、そのほとんどは「あなたも翻訳家になれる」式の「やさしく、分かりやすい」本、言い換えれば、内容が薄い本だと思えてならない。類書がいくらでもあると思えるなかであえて本書を書いたのは、翻訳という職業、翻訳者という生き方を扱った本格的な本はまだないと思うからだ。

翻訳は地味な仕事だ。縁の下を這いずりまわり、ない力を振り絞っているのが翻訳者だ。だが、その役割は決して小さくはない。外国のすぐれた文化、知識、情報を日本人が日本語で吸収できるようにするのが翻訳の役割である。それによって、明日の日本文化を支える基盤を築く一助になるのが翻訳である。

このような重要な役割を担っている点を考えれば、

山岡 洋一

翻訳とは何か、翻訳とはどういう職業かについての真剣な議論がほとんどないのは残念なことだ。翻訳が気楽な副業、気楽な内職になるかのような話ばかりが目につくのは悲しいことだ。翻訳という仕事を軽く見る傾向が、翻訳の学習者や翻訳教育関係者、翻訳書の読者、そして一部の編集者や翻訳者にまであるのは心痛むことだ。

翻訳を職業としている者にとって心外だということとどまらないかもしれない。明日の日本文化を支える基盤を築く一助になるのが翻訳である。その翻訳を軽視する傾向が強まり、翻訳の質が低下していけば、日本文化の質にもいずれ影響が及ぶ可能性がある。ボディブローのように徐々にではあるが、日本文化の足腰を弱めていくことになりかねない。

本書を書いたのは、以上のように考えたからである。一生をかけた職業として翻訳に真剣に取り組んでいる人たち、これから取り組もうとしている人たち、編集者や発注者として翻訳に関与している人たち、読者の立場で翻訳に興味をもつ人たちが翻訳について深く考える際に、わずかでもヒントになればと願っている。

■ 〈翻訳は人生と交換しても不足なき営為〉

全編に貫かれるその思い—「翻訳とは何か—職業としての翻訳」

今野 哲男（「翻訳の世界」元・編集長）

森鷗外はその昔、「原著者が日本語で書くとしたらこう書くだらうと思える訳文を書く」といったらしい。当然至極な言葉だが、これを、この国における翻訳の歴史と現状という文脈の中で再考してみると、鷗外の一見単刀直入な心情の吐露には、俄かに立ち上るような、ある感慨の深さが感じられる。

本書は、まるで空気のように一般化し、そのくせ（あるいは、そのせいで）原点が見過ごされたままになっている翻訳というものについて、言語・文化一般、大まかな翻訳通史、翻訳技術、職業情報レビューといった、様々な観点から考え直した論考だ。

副題に「職業としての翻訳」とあるのは、昨今の実用情報一本槍のリクルート本におもねるためでは無論なく、M. ウェーバーの『職業としての学問』のひそみにならった、翻訳の現状への苛立ちと若干の皮肉とが含まれているせいである。

著者の論考は、「真夜中の電子メールとアマゾンの

蝶々」という好奇心と想像力をかきたてる不思議な題を持った序章で始まり、以後、「歴史のなかの翻訳家」、「翻訳の技術」、「翻訳の市場」、「翻訳者への道」と実に目まぐるしい展開を見せる。上げられた例証は多方面に及び、比喩に満ちた独特の文体も、読み物として十分に魅力的だ。

しかし、本書を貫く基本モチーフは、「第6章 職業としての翻訳」と「終章 文化としての翻訳」の中で、象徴的にまとめられているとあってよいと思う。つまり、著者はプロ翻訳家として、翻訳は人生と交換しても不足なき営為であり、そこを志しその携わる者は、その点に関する理解をよもや欠いてはならないと考えて、本書を書いたのである。

本書の個々の局面に見える著者のコメントは、そのせいか軽率な学習者なら恐れ入ってしまうほど辛辣なものだ。だが、もって銘すべし。翻訳の魅力は、この困難の中にこそ、存在するのである。